

P3-34-2 胚移植におけるカテーテル付着物の妊娠率、生産率への影響

昭和大¹, 芝公園かみやまクリニック²
東 美和¹, 近藤哲郎¹, 奥田 剛¹, 岩崎信爾², 関沢明彦¹

【目的】胚移植の際、子宮への刺激を最小限にし、適切な位置に移植することが妊娠率の向上に繋がると報告されている。そこで我々は、胚移植に使用したカテーテルに付着した血液や子宮内膜の状態により妊娠率や生産率に差が出るかを検討した。【方法】2005年1月～2012年6月に経腹超音波下に胚移植（胚盤胞、初期胚の1個）を施行した症例を対象に、新鮮胚移植（F-ET）と凍結胚移植（T-ET）に分類しさらに各々の胚盤胞、初期胚での胚移植に使用したカテーテル付着物（血液、内膜）の有無と妊娠率、生産率を後方視的に検討した。なお、本研究は当院の倫理委員会の承認を得て実施した。【成績】上記期間の666周期 [F-ET；胚盤胞114周期、初期胚364周期、T-ET；胚盤胞84周期、初期胚104周期] を対象にした。平均年齢はF-ET；38.8±4.0歳、T-ET；38.7±4.4歳で、138例が妊娠し、生産は77例であった。胚移植カテーテル付着物あり：なしの各々の妊娠率はF-ET；胚盤胞18.6%：39.4%*（p=0.02）、初期胚14.8%：19.1%、T-ET胚盤胞15.6%：36.5%*（p=0.03）、初期胚14.6%：14.3%、生産率はF-ET；胚盤胞9.3%：28.2%*（p=0.02）、初期胚5.8%：11.0%、T-ET胚盤胞9.4%：17.3%、初期胚10.4%：7.14%であった。新鮮胚の胚盤胞移植ではカテーテルに付着物がある症例が、ない症例より妊娠率、生産率ともに低い結果が得られ、凍結胚移植での胚盤胞移植において付着物がある症例で妊娠率が低い結果であった。【結論】移植カテーテルに付着物があり子宮内膜を損傷した可能性のある症例で妊娠率、生産率が低くなることを示した。妊娠率、生産率の向上のために子宮内膜を傷つけないよう細心の注意を払い胚移植を行うことの重要性が示された。

P3-34-3 Non-PCOS症例のインスリン抵抗性がIVF-ET治療成績に及ぼす影響

琉球大
銘苅桂子, 平敷千晶, 安里こずえ, 新田 迅, 大石杉子, 金城忠嗣, 正本 仁, 青木陽一

【目的】PCOS（polycystic ovary syndrome）はインスリン抵抗性に起因することから、インスリン抵抗性改善薬の適応となるが、Non-PCOS症例でインスリン抵抗性を認めた場合の病的意義については不明な点が多い。不妊治療を要する女性の高齢化により、インスリン抵抗性を有するNon-PCOS症例の増加が推測される。そこで本研究は、Non-PCOS症例におけるインスリン抵抗性のIVF-ET成績に与える影響を明らかにすることを目的とした。【方法】2010.1～2012.12に初回IVF-ETを施行されたNon-PCOS症例（本学会のPCOS診断基準を充たさない症例）116症例を対象とし後方視的に検討した。HOMA：空腹時血糖×インスリン値/405が2.5以上をインスリン抵抗性ありと診断し、インスリン抵抗性ありとされた28症例をIR（+）群、抵抗性なしとされた88例をIR（-）群として両群のIVF-ET成績を比較検討した。【成績】IR（+）群とIR（-）群において、年齢（37.3±5.3 vs. 37.3±4.0歳）、FSH基礎値（8.4±4.2 vs. 7.6±2.2 mIU/ml）、LH/FSH値（0.62±0.5 vs. 0.75±0.48）に有意差はなく、IR（+）群のBMIは高い傾向を認めた（24.9±3.8 vs. 22.5±2.9, p=.08）。採卵数はIR（+）群で有意に少なかったが（6.0±5.8 vs. 9.5±5.8個, p=.02）、受精卵数、良好胚数は両群に有意差を認めなかった。また、IR（+）群とIR（-）群における採卵あたりの臨床的妊娠率（32.1 vs. 25%）、生児獲得率（17.9 vs. 14.8%）、流産率（33.3% vs. 41%）にも有意差を認めなかった。III度以上のOHSSと妊娠糖尿病は両群において各1例認められた。【結論】Non-PCOS症例におけるインスリン抵抗性は、IVF-ET治療成績に大きな影響を及ぼさないことが示唆された。

P3-34-4 37歳以上の不妊患者における融解胚移植時の加齢が治療成績に与える影響

山近記念総合病院
小野由紀子, 拝郷浩佑, 生方良延, 中川博之, 本田育子

【目的】高年齢不妊患者は加齢に伴い移植可能胚の獲得が難しくなるため、融解胚移植（FET）よりも採卵を優先させる場合があるが、移植時の母体年齢が融解胚移植後の治療成績へ与える影響は明らかではない。今回我々は当院で行った37歳以上の融解胚移植周期について採卵時と移植時の年齢から治療成績を検討した。【方法】2006年4月から2012年11月までに当院で体外受精あるいは顕微授精を実施し、融解胚移植に至った37～45歳の214症例、329周期を対象とした。胚凍結は採卵3日目から6日目の移植可能胚をガラス化法により行った。採卵年齢が37～39歳でFET年齢が37～39歳と40～42歳をそれぞれA群とB群、採卵年齢が40～42歳でFET年齢が40～42歳と43～45歳をそれぞれC群とD群、採卵年齢とFET年齢がともに43～45歳をE群とした。採卵年齢と移植年齢から妊娠率、流産率、妊娠継続率の比較を行った。【成績】A群とB群の妊娠率は58/140（41.4%）と9/32（28.1%）、C群とD群の妊娠率は33/103（32.0%）と3/17（17.6%）、E群は3/34（8.8%）だった。有意差は認めなかったが、採卵年齢が同じでも移植年齢が上がれば妊娠率は低下する傾向にあった。また、流産率はA群とB群で18/58（31.0%）と3/9（33.3%）、C群とD群は19/33（57.6%）と2/3（66.7%）で、移植年齢よりも採卵年齢の上昇に伴って上昇した。移植あたりの継続妊娠率はA群28.6%、B群18.8%、C群13.6%、D群5.9%、E群2.9%となり採卵時と移植時の加齢の影響を受けて低下した。【結論】採卵年齢が同じであっても移植時の年齢が上がると妊娠率は低下する傾向があった。しかし、流産率は採卵年齢に影響を受けることから、採卵を優先することで妊娠継続率の向上につながる可能性も示唆された。